

# ヨーロッパ弓奏楽器の歴史と変遷

～フィドルって何？ バイオリンとどこが違うの？～



a. ピーテル・ブリューゲル(父)《阿呆の祭り》

## □はじめに

「バイオリン/フィドル音楽の休日」は、弦楽器を使用した様々な音楽が集まるお祭です。

それでは、**バイオリン**<sup>1</sup>と**フィドル**の違いをご存知ですか？

そもそもフィドルという言葉に馴染みのない人も多いと思いますが、こんにち、**フィドル**という言葉はバイオリンの別名として使われています。しかし、**フィドラー**（フィドル奏者）とは決してクラシック音楽のバイオリニストを指す言葉ではありません。フィドルと称される楽器が演奏される音楽のジャンルは、**アイルランド**<sup>2</sup>、スコットランド、スカンジナビアなどの伝統音楽、**オールドタイム**<sup>3</sup>、カントリー、**ブルーグラス**<sup>4</sup>のようなアメリカのルーツミュージックなどです。また、ヨーロッパの**古楽**<sup>5</sup>の演奏でフィドル（中世フィドル）という名前の楽器が使われていることに気づいた人がいるかもしれません。

このような言葉の使い分けは、バイオリン/フィドルのルーツと、その楽器が幅広い人々に愛されてきたことと深い関係があります。

本稿では、フィドルやバイオリンを始めとする**ヨーロッパの弓奏楽器**<sup>6</sup>の歴史をひもとき、ひとつの楽器にふたつの名前がある理由やその歴史の変遷を探ってみることにします。

<sup>1</sup> 本稿では、バイオリン以外の“v”の音が入る楽器（ヴィオラなど）の日本語表記に「ヴ」の文字を用います。

<sup>2</sup> アイルランドの伝統音楽（アイリッシュ・トラッド）は、リールやジグ、ホーンパイプなど様々なダンス音楽や歌からなり、カントリー、ブルーグラスなどその後のポピュラー音楽のルーツとなった。

<sup>3</sup> 北アメリカの移民による伝統的な音楽であり、カントリーやブルーグラスのルーツである。使用される楽器は、ヨーロッパ由来のフィドルとアフリカ由来のバンジョーが中心。

<sup>4</sup> 1940年代、アメリカのアパラチア地域で生まれた音楽。バンジョー、フィドル、マンドリンなどアコースティックの弦楽器によるアンサンブルが特徴。

<sup>5</sup> ヨーロッパの中世、ルネサンス、バロック音楽の演奏において、音楽史の研究成果に基づき、当時の楽器や演奏様式を復元しようとするムーブメント。近年、古典派以降の音楽にもこの手法を適用する動きが広がっている。

<sup>6</sup> 本項では、弓で弦を擦って音を出す楽器の総称として「弓奏楽器」という用語を使います。

## □アジアで生まれ、イスラムとともにヨーロッパへ

馬の毛などを張った弓で弦を擦って鳴らす弦楽器は、アジアで発明されました。現在、インドやスリランカで**ラーヴァナハタ** (ravanahatha) と呼ばれている楽器は、伝説では古代の王ラーヴァナ (叙事詩『ラーマーヤナ』に登場する) の時代に初めて作られたとされています。現在のラーヴァナハタは、丸い瓢箪にヤギなどの革を張った胴と竹または木製の竿からなり、ガット弦<sup>7</sup>や鋼などの弦を数本張ります。弓の毛は馬の尻尾を用います。演奏の際は楽器を胸に当てます。

1世紀にアフガニスタン北部で使用された弓奏楽器は、木をくり抜いて作った細長い胴に平らな表板を持っていました。この楽器は10世紀以上にわたって広く普及し、7世紀ごろにはアラビアに伝わり、**ラバーヴ** (rabav)、**ルバーブ** (rubab) などの名でイスラム圏に浸透しました。



b. ラーヴァナハタ



c. 色々な地域のラバーブ



ラバーブは8世紀にはイスラム勢の西進に伴いスペインに伝わり、**レベック** (rebec) と呼ばれるようになりました。同じ頃、ラバーブはビザンチン帝国を経由してギリシャや東ヨーロッパ、イタリアなどに伝播し、**リラ** (lyra) という名で親しまれました。この名前は、本来は古代ギリシャで使用された**縦琴**を意味しました。



d. 古代ギリシャのリラ



e. ビザンチンのリラ

<sup>7</sup> ヒツジなどの腸を素材として作られた弦。

## □レベックとフィドル——中世

レベックとリラ、この2種類の弓奏楽器は、中世初期に交易路を通じてヨーロッパ各地に広まりました。その過程で、ビザンチンから伝わったリラ系の楽器は、**フィドル** (fiddle) と呼ばれるようになっていきました。



f. 中世のレベック

中世ヨーロッパでは、レベックとフィドルというふたつの楽器は、ルーツは同じですが異なる特徴を持ち、演奏される場所にも区別がありました。

レベックは、村回りの楽師によって、民衆的なダンスの伴奏に使用されました。初期には皮張り胴と竿に対して直角の糸蔵を持ったものと、すべて木で作られた胴と竿に対してまっすぐな糸蔵を持ったものの2種類が独自に存在していましたが、14世紀ごろには木製のスタイルが定着しました。演奏は、当初は腿に立てて演奏されましたが、その後胸に当てて演奏するスタイルが一般化しました。レベックの流れを汲む楽器は、**ポシェット** (pochette) などの名称で19世紀ごろまで使われました。



g. ポシェッタ



h. 中世のフィドル

フィドルは、高貴な楽器として宮廷で使用されました。楽器の形状は様々で、西ヨーロッパでは細い洋ナシ型、南ヨーロッパでは楯形、中央ヨーロッパではほぼ円形と地方差がみられました。演奏の際は胸に当てるなどして楽器を固定しました。イギリスとフランスでは14世紀初頭まで、

腿で挟んで構えるタイプのフィドルが存在しましたが、このタイプのフィドルは8の字型にくびれた胴をしていました。

当時はモノフォニー<sup>8</sup>の音楽が主流であり、楽器もそれに適した構造をしていました。フィドルの駒<sup>9</sup>は平らで、ひとつの楽器でドローン<sup>10</sup>を鳴らしながら旋律を奏でることが一般的に行われていたようです。



i. 様々な形のフィドル

弓で弦楽器を弾くというアイディアは、リラやロッテ (Rotte) など在来の豎琴型の弦楽器にも影響を与え、クルース (crwth) という楽器が生まれました。これは中世から19世紀前半まで使用されたフィドルに似た民族楽器で、ドローン専用の開放弦がありました。クルースは吟遊詩人によって歌の伴奏に使われ、その後アイルランド、ウェールズ、北フランスに伝わりました。



j. ロツテ



k. クルース

<sup>8</sup> 和声 (ハーモニー) を使わず、単一のメロディだけで演奏される音楽。

<sup>9</sup> バイオリンなどの弦楽器の表板に張られた弦を中間で支える鞍に似たパーツ。ブリッジともいう。

<sup>10</sup> 曲の演奏中、弦楽器や管楽器によって鳴らされる持続音。伝統音楽や民族音楽では普通に使われる。

## □腕に抱えるか、脚に挟むか——中世・ルネサンス

ポリフォニー<sup>11</sup>の音楽が流行するにつれ、弓奏楽器は旋律を奏でやすい形状に変化していきました。15世紀ごろには、1本1本の弦を個別に弾きやすくするために湾曲した駒を持ち、様々な角度に動く弓を邪魔しないよう、胴体にくびれをつけたフィドルが登場しました。音量を増すために駒が高くなり、それに対応する指板に対して曲がった糸巻きや、現在のバイオリンに似た、糸蔵やペグを持った楽器が作られるようになりました。調弦は5度<sup>12</sup>間隔だったようです。このような改良を加えられた3～4弦の8の字型に近い形をしたフィドルは、**ヴィオラ・ダ・ブラッチョ** (viola da braccio = 腕のヴィオラ) と呼ばれていました。また、これにドローン弦を取り付けた**リラ・ダ・ブラッチョ** (lyra da braccio) という楽器も存在しました。



l. ヴィオラ・ダ・ブラッチョ



m. リラ・ダ・ブラッチョ

これに対して、腿に挟んで演奏する**ヴィオラ・ダ・ガンバ** (viola da gamba = 脚のヴィオラ、**ヴィオール** (viol) ともいう。) という別の楽器がありました。こちらは6弦のものが多く、肩はブラッチョよりもなだらかで、指板にフレット<sup>13</sup>がついているなどの違いがありました。調弦は中央に3度を挟んだ4度で、ギターに似たスペインの楽器、**ヴィウエラ** (vihuela) との関係が指摘されています。



n. ヴィオラ・ダ・ガンバ



o. ヴィウエラ

<sup>11</sup> 独立した複数の声部 (パート) からなる音楽。

<sup>12</sup> 5度とは、ドレミファソラシドの音階でいうと、例えば、ドとソ、レとラ、ミとシ、ファとドの間隔をいう。

<sup>13</sup> ギターやマンドリンなどにみられる指板の上に音高に合わせて付けられた隆起。バイオリンや三味線にみられるようなフレットの無い状態をフレットレスという。

この2種類の楽器はそれぞれ異なるサイズ・音域の楽器が制作され、合奏に使用されました。ヴィオラ・ダ・ガンバの音色は柔らかく、宮廷の王侯貴族が愛好したのに対して、ヴィオラ・ダ・ブラッチョは音が鋭く、野外演奏などに使われました。ブラッチョはまた、吟遊詩人<sup>14</sup>やロマ<sup>15</sup>やジブシーによって演奏される野卑な楽器ともみなされていたようです。

ブラッチョは、フィドルの仲間です。ガンバが上流階級でもてはやされるにつれ、かつて高貴な楽器とされたフィドルは民衆的な楽器となっていったのです。

---

## □バイオリンの出現——ルネサンス・バロック

**バイオリン** (violin) という名前の楽器は16世紀の初め、ルネサンスの最盛期にイタリアで出現しました。16世紀の半ばには現在のバイオリンとほとんど変わらない形となり、100年あまりでヨーロッパ全域に広まりました。

バイオリンはヴィオラ・ダ・ブラッチョの一種です。つまりフィドルの一種です。ヴィオラ・ダ・ガンバ（ヴィオール）を愛好していた王侯貴族たちは、当初はこの庶民的な雰囲気のある楽器にあまり好感を示さなかったようですが、16世紀半ば以降、宮廷での合奏などにも採用され、人気の楽器となりました。このことからバイオリンは「楽器のシンデレラ」と呼ばれています。

17世紀にはアマティ<sup>16</sup>やストラディヴァリ<sup>17</sup>などの名匠が活躍し、現代のバイオリンの基礎が形作られました。



p. 17世紀のヴァイオリン  
(バロック・ヴァイオリン)

とはいえ、ストラディヴァリのような一流の職人が作る楽器は、裕福な人々のために作られた楽器でした。庶民のバイオリンは、あり合わせの材料で自作したような質素なものだったと思われます。そのような楽器は、依然としてフィドルなどの昔ながらの名称で呼ばれていたかもしれません。

---

<sup>14</sup> 詩曲を作り、各地を吟遊した人々。民衆文化を各地に伝播させる役割を果たした。宮廷に雇われることもあった。

<sup>15</sup> ジブシーと呼び習わされてきた集団のうち、主に北インドのロマニ系に由来し、主に中東欧に居住する移動型民族。

<sup>16</sup> 1550年から1740年の間、イタリア北西部のクレモナで活躍したヴァイオリンの製作者一族。

<sup>17</sup> アントニオ・ストラディヴァリ（164?～1737）は、イタリア北西部のクレモナで活動した弦楽器製作者。

## □多様化と収斂——ルネサンス・バロック・古典派

16世紀のバイオリンには様々なサイズのものがあり、ソプラノ、アルト、テノール、バスに相当する音域のバイオリンが制作されました。1556年の文献によれば、当時のソプラノは現在のバイオリンと同じ調弦で、アルトとテノールは現在のヴィオラに相当、バスは現在のチェロよりも長2度低い調弦で演奏されたようです。1626年にフランス王ルイ13世によって創設された、のちのオーケストラの原型とされる楽団「王の24のヴィオロン (Vingt-Quatre Violons du roi)」には、様々なサイズのバイオリン族の楽器が含まれていました。そこではかなり大きな楽器も、小さなバイオリンと同じように肩に乗せて演奏されていたようです。

こうした中から、中音域の楽器をひとつに集約した**ヴィオラ** (viola)、バス音域の楽器**チェロ** (cello) や、ガンバ系の楽器の影響を受けた**コントラバス** (contrabass) が登場します。

17世紀後半、チェロとコントラバス用として金属線をガットに巻きつけた弦が発明されます。それまで一般的だったむき出しのガット弦よりも安定した低音が出せるようになり、以降、チェロにフォーカスした楽曲が作られるようになりました。ヴィオラはバロック時代を通して、オーケストラの中音域を担う目立たない楽器とみなされてきましたが、古典派の時代には弦楽四重



q. 「王の24のヴィオロン」

奏<sup>18</sup>などで重要度を増していきました。

ヴィオラ・ダ・ガンバの仲間は18世紀ごろまでバイオリン族と共存していましたが、徐々に姿を消してゆきました。交響曲のような大規模な音楽が人気を集めるにつれ、繊細な音を特徴としたヴィオールは顧みられなくなったのです。しかし近年、古楽の普及に伴って演奏される機会が増えています。

<sup>18</sup> バイオリン2人、ヴィオラ、チェロの4人で構成される室内楽。18世紀後半、ボッケリーニやハイドンの作品が嚆矢とみられる。



r. 弦楽四重奏を演奏するハイドン

---

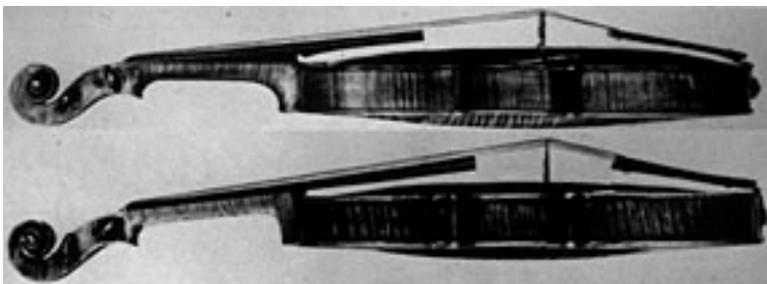
## □より大きく華やかな音を求めて——ロマン派

19世紀にはロマン派音楽が台頭し、オーケストラの人員は増加し、ソリストの名手たちは舞台上で超絶技巧を繰り広げ、市民は料金を払ってコンサートに通いました。そうした音楽と社会の変化の中で、多くの既存の楽器に改造が加えられました。

バイオリンを始めとする弦楽器では、産業革命によって製造可能になった強力な金属の巻弦が使用され始め、駒が高くなり、その圧力に耐えられるよう楽器の構造が変わりました。高音を演奏しやすくするために指板が延長されました。より力強いボウイング（弓運）を可能にする逆反りになった弓や、楽器を固定しやすくする顎当てもこのころ発明されました。現代のバイオリン（モダン・バイオリン）の姿はこの時代に完成されました。



s. バイオリンの弓 17世紀（上）と19世紀（下）



t. 横から見たバロック・バイオリン（上）とモダン・バイオリン（下）

---

## □量産と大衆化——ポピュラー音楽

18世紀末、安価な既製品のバイオリンが出回り始め、民衆の手に渡るようになってきました。ヨーロッパ各地で作られてきた多様な楽器は既製品のバイオリンに置き換わり、高級楽器としての「バイオリン」と、市井の楽器としての「フィドル」の間に、実質的な違いはなくなりました。

しかしながら、王侯貴族や特権階級の音楽（いわゆるクラシック音楽）と、ダンス・ミュージックを主とする、中世から緩やかに受け継がれてきた一般民衆の音楽との間には大きな隔たりがありました。両者が混じり合うことはなく、かくして「バイオリン」と「フィドル」というふたつの呼称が、ひとつの楽器の上に完全に重なりあうようになっていったのでした。

19世紀末から20世紀初頭には、ヨーロッパや日本で大量生産されたバイオリンが世界中に輸出されました<sup>19</sup>。それらのバイオリンは、様々な地域の音楽ジャンルに影響を与えました。日本では、明治・大正時代に流行した「演歌」にバイオリンが取り入れられ、書生姿の演歌師がバイオリンを手に街頭を流しました。スコットランドやアイルランドからの移民によって伝えられ、独自の発展を遂げたアメリカのカントリー・ミュージックを支えたのも、そのような廉価なバイオリン/フィドルでした。



u. 神長瞭月  
「バイオリン演歌」の草分け



v. フィドリン・ジョン・カーソン  
カントリー・ミュージックの最古の録音を残した。

---

## □おわりに

以上、バイオリンとフィドルをめぐる歴史の変遷を見てきました。ひとつの楽器の歴史を辿ることで、よく知らなかったジャンルの音楽がもっと身近に、また、身近な音楽がより深いものを感じられたのではないのでしょうか。

ところで、日本では、フィドルという呼び名が定着していないため、文芸・演劇・映画などに登場するフィドルを「バイオリン/ヴァイオリン」と訳してしまうことが多いようです。例えば、ミュージカル『屋根の上のバイオリン弾き』の原題は、“Fiddler on the Roof”です。テレビドラマ『大草原の小さな家』でローラの父親が弾く楽器は、バイオリンではなくフィドルだったはず

です。  
また、19世紀前半に活躍したアメリカの小説家・詩人・評論家、エドガー・アラン・ポーの作品に「鐘楼の悪魔」（The Devil in the Belfry）という素っ頓狂な短編があります。この小説に

---

<sup>19</sup> 1887（明治20年）に創業した鈴木バイオリン製造は、大正時代、世界各地への輸出により業況が拡大し、「当時従業員は1000名を越え、毎日500本のバイオリン、1000本以上の弓が量産され、輸出のみで年間に10万本のバイオリン、50万本の弓を記録した」という。（<https://www.suzukiviolin.co.jp/about/history/>）

登場する「小柄な外国人風の青年」が片腕に持っていた大きな楽器は「バイオリン」や「胡弓」と訳されていますが、原文ではfiddleなのです。

原文 : Under one arm he carried a huge chapeau-de-bras, and under the other a **fiddle** nearly five times as big as himself.

和訳1 : 片方の腕には大きなシャポードブラ、もう片方の腕には自分の5倍くらいの大きさの**バイオリン**を持っていた。( <https://ja.wikisource.org/wiki/鐘楼の悪魔> )

和訳2 : 片腕には大きなシャポー・ド・ブラを抱え、もう一方の腕には自分の五倍ほどもありそうな**胡弓**を抱えている。(佐々木直次郎訳)

クラシック音楽の花形楽器として高貴で近寄り難いイメージがあるバイオリン。身近で親しみやすいけれど低俗なイメージがつきまとうフィドル。どちらを好むかは人それぞれですが、もとをたどればルーツは同じ。今では楽器自体も何ら変わりません。

ヨーロッパを中心にバイオリン・コンクールが開催されているのと同様に、米国では各地でフィドラーズ・コンテスト<sup>20</sup>が開催されています。そうしたコンテストを動画サイトで検索すると、幼い子供たちから高齢の方までがフィドルに親しみ、鍛錬している姿を垣間見ることができます。

日本でも、もっと気楽にバイオリン/フィドルに楽しむ人が増え、あちらこちらでバイオリン/フィドル音楽が溢れるようになっていくことを大いに期待したいところです。

それでは、「**バイオリン/フィドル音楽の休日**」をどうぞお楽しみください！

2022年2月 N. Hayashi & M. Hayashi

---

<sup>20</sup> 例えば、アイダホ州ウィーザーで毎年開催されているNational Old-Time Fiddlers' Contest & Festival ( <https://www.fiddlecontest.org> )では、年代ごとに分けられた7つのランクでコンテストが行われる。

### 《参考》

アルバート・チョンピン・チュワン著 田中良司訳 『一冊まるごとヴァイオリン』 芸術現代社 2013  
奥和宏 『アメリカン・ルーツ・ミュージック 楽器と音楽の旅』 音楽之友社 2004  
小沢昭一 『小沢昭一が招いた 日本の放浪芸大会』 ビクター 2001  
フィリップ・ウィルキンソン著 大江聡子訳 『50の名器とアイテムで知る 図説 楽器の歴史』 原書房 2015  
茂木健著 『フィドルの本——あるいは縁の下のヴァイオリン弾き』 音楽之友社 1998  
森重信郎著 『楽器学入門——写真でわかる！ 楽器の歴史』 時事通信社 2015  
200CD古楽への招待編纂委員会 『200CD クラシック音楽の探求 古楽への招待』 立風書房 1996  
[https://www.chopin.co.jp/media/Encyclopedia\\_The\\_VIOLIN/a3672](https://www.chopin.co.jp/media/Encyclopedia_The_VIOLIN/a3672)  
<https://en.wikipedia.org/wiki/Ravanahatha>

### 《画像の出所》

- a. ブリュエゲル《阿呆の祭り》 <https://blog.canpan.info/poepoesongs/archive/541>
- b. ラーヴァナハタ <https://en.wikipedia.org/wiki/Ravanahatha>
- c. 色々な地域のラバーク [https://museum.min-on.or.jp/collection/detail\\_G00151.html](https://museum.min-on.or.jp/collection/detail_G00151.html) <https://www.britannica.com/art/rabab> [https://museum.min-on.or.jp/collection/detail\\_G00150.html](https://museum.min-on.or.jp/collection/detail_G00150.html)
- d. 古代ギリシャのリラ [https://ja.wikipedia.org/wiki/リラ\\_\(楽器\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/リラ_(楽器))
- e. ビザンチンのリラ [https://en.wikipedia.org/wiki/Byzantine\\_lyra](https://en.wikipedia.org/wiki/Byzantine_lyra)
- f. 中世のレベック <https://study.com/academy/lesson/what-is-a-rebec.html> [https://saisaibatake.ame-zaiku.com/gakki/violin/violin\\_fiddle\\_rebec.html](https://saisaibatake.ame-zaiku.com/gakki/violin/violin_fiddle_rebec.html)
- g. ポシェッタ <https://www.pinterest.jp/pin/426223552206414373/>
- h. 中世のフィドル [https://saisaibatake.ame-zaiku.com/gakki/violin/violin\\_fiddle\\_rebec.html](https://saisaibatake.ame-zaiku.com/gakki/violin/violin_fiddle_rebec.html)
- i. さまざまな形態のフィドル <https://earlymusicmuse.com/lifting-the-veil-on-the-vielle/> <http://www.trombamarina.com/instruments/vielle> <https://earlymusicmuse.com/lifting-the-veil-on-the-vielle/> <https://caslabs.case.edu/medren/medieval-instruments/vielle-medieval/>
- j. ロッテ <https://www.pinterest.jp/pin/203365739403262718/>
- k. クルース [https://www.musashino-music.ac.jp/guide/facilities/museum/web\\_museum/crwth](https://www.musashino-music.ac.jp/guide/facilities/museum/web_museum/crwth)
- l. ヴィオラ・ダ・ブラッチョ [https://en.wikipedia.org/wiki/Viola\\_da\\_braccio](https://en.wikipedia.org/wiki/Viola_da_braccio)
- m. リラ・ダ・ブラッチョ <https://www.pinterest.jp/georgesmohsen/violin/>
- n. ヴィオラ・ダ・ガンバ [http://www.thecipher.com/viola\\_da\\_gamba\\_cipher.html](http://www.thecipher.com/viola_da_gamba_cipher.html)
- o. ヴィヴェーラ <http://micha072.blog.fc2.com/blog-entry-2348.html>
- p. 17世紀のバイオリン <https://en.wikipedia.org/wiki/Violin>
- q. 王の24のヴィオロン <https://cmbv.fr/fr/vingt-quatre-violons-du-roi-grande-bande>
- r. 弦楽四重奏を演奏するハイドン <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:HaydnPlaying.jpg>
- s. バイオリンの弓 17世紀（上）と19世紀（下） [https://en.wikipedia.org/wiki/Bow\\_\(music\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Bow_(music)) [http://hst254.host03.loswebos.de/wp/?attachment\\_id=1362](http://hst254.host03.loswebos.de/wp/?attachment_id=1362)
- t. 横から見たバロック・バイオリンとモダン・バイオリン <https://caslabs.case.edu/medren/baroque-instruments/violin-baroque/>
- u. 神長瞭月 <https://tyumeji.blog.fc2.com/blog-category-11-3.html>
- v. フィドリン・ジョン・カーソン [https://en.wikipedia.org/wiki/Fiddlin%27\\_John\\_Carson](https://en.wikipedia.org/wiki/Fiddlin%27_John_Carson)